

Internet Week 2018

～知ればもっと楽しくなる!～ 開催報告

2018年11月27日(火)から30日(金)まで、2018年もInternet Weekを開催しました。会場は、今年で3回目となる東京・浅草橋のヒューリックホール&ヒューリックカンファレンス。三つの同時開催イベントを含めると、総プログラム数は33、最終的な参加者数は延べ約2,400名となりました(同時開催イベントを含む)。

今回のテーマ：知ればもっと楽しくなる!

Internet Week 2018のテーマは「知ればもっと楽しくなる!」。AI、IoTなどの最新技術にスポットライトが当たる一方で、インターネットが止まらず安定して使えるように日々の業務を行っているInternet Weekの参加者は、まさに縁の下の力持ちです。インターネットを支える基盤の技術について、改めてその興味深さ、楽しさを知ってもらいたいと考えました。テーマに込めた想いにつきましては、詳しくは実行委員長の挨拶 [※1](#) をご覧ください。



ホールでのプログラムの様子

今回のプログラム：よりグローバルに、より実践的に

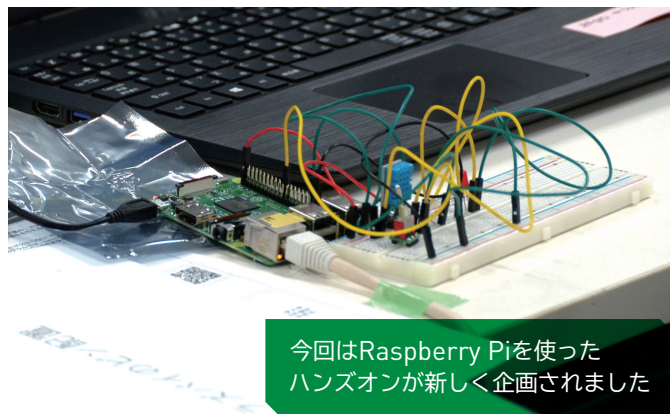
実行委員会が検討した今年のテーマや方針を基に、インターネットをより良くするために活動している各協力団体に声がけして、各組織からプログラム委員を選出いただき、プログラム委員会 [※2](#) が始動したのが2018年6月、Internet Week本番のおよそ半年前からです。

今回のテーマに基づき、プログラムの中でも特に印象的だった点が二つあります。

一つ目は「知ればもっと楽しくなる!」を下の世代にも伝えるために、若手・初心者の方向けのプログラムを多く開催したことです。もちろん、毎年プログラム企画の初期段階では毎年、新しい方・若い方にも来ていただきたいということで、これらは検討事項の一つにはなってはいました。しかしながら、プログラムの枠が限られていることもあり、出来上がったプログラムを見ると、いつの間にかほとんどのセッションが、例年Internet Weekに参加している方や、中堅・ベテランエンジニア向けになっているというのが実情でした。

そこで今回は、「ネットワーク運用チュートリアル～分かると楽しいインターネットのお仕事～」 「Internet Week流Security Bootcamp」など、基礎力向上をうたったセッションが初日に並びました。20代の参加者の割合が前回より増えた理由の一つは、これなのかもしれません。またそれ以外の層の方からも、自分の知識を更新する良い機会になったというようなコメントが、参加者アンケートでいくつか寄せられています。

また、例年人気のハンズオンプログラムも今回は増やし、ネットワーク運用自動化やDockerコンテナなど、知ればもっと業務が効率化できるような最新技術も体験していただき、参加された方からはとても好評でした。いずれも早々に満席となり、担当プログラム委員やご講演者にハンズオン環境が受け入れ可能かなど最大限ご検討いただき増枠したのですが、それもあつという間に埋まるなど、その反響の大きさという観点では、今回もとても印象に残っています。



今回はRaspberry Piを使ったハンズオンが新しく企画されました

※1 Internet Week 2018実行委員長からのご挨拶
<https://www.nic.ad.jp/iw2018/greeting/>

※2 Internet Week 2018実行委員会・プログラム委員会
<https://www.nic.ad.jp/iw2018/committee/>

※3 Internet Week 事務局のSNS
Twitter https://twitter.com/InternetWeek_jp
Facebook <https://www.facebook.com/InternetWeek>

IP Meeting 2018

～知ればもっと楽しくなる!～

開催
報告

そしてもう一つは、普段意識的に収集していない情報や知識を「知ればもっと楽しくなる」ということです。例えば、既にJPNIC Blogで担当プログラム委員の中川あきらさんが語っていましたが、今回はIPv6のセキュリティに関する話題をセキュリティ担当者の方にも意識していただきたく、単独プログラムではなく、先にご紹介した「Internet Week 流 Security Bootcamp」に組み込みました。このプログラムでは他にも、Internet Weekでは初めて本格的に、制御システムのセキュリティを取り上げました。また「IP Meeting 2018」では、今年海賊版サイト対策に関連して注目されたオンライン広告の仕組みを、慶應義塾大学 SFC 研究所の寺田真治さんと、D.A. コンソーシアムホールディングス株式会社の原田俊さんご紹介いただきました。

これら三つのパートまたは講演に関して共通していたのは、担当プログラム委員やご講演者が、Internet Weekの参加者に興味を持ってもらえるだろうかと悩みながら工夫していた点。そのかきもあって、終了後に参加者のSNSへの投稿やアンケートに寄せられた「新鮮だった」「今まで知らなかった知識が得られて良かった」というようなコメントを確認し、嬉しそうにしている姿が印象的でした。

ご講演者様の了承が得られた講演資料につきましては、Web サイトにて一般公開しています。ぜひお役立てください。

Internet Week 2018 プレゼンテーション
<https://www.nic.ad.jp/ja/materials/iw/2018/proceedings/>



次世代の力が感じられた運営の裏側

運営面でも、今年は若い力を感じました。例えば、会場のネットワークの設計/構築/運用を行っている Internet Week 2018 NOC チーム。スタッフ控室のお弁当などが減るペースが、例年よりも早いなど会期中に感じていたのですが、今年はいつもより少し人数が多く、また学生さんの割合も高くなっていました。

最終日、会場からの撤収作業も終えた NOC チームのとある学生さんに「1週間、大人(社会人)に囲まれて大変だったでしょう?」と労って声をかけたところ、「いやー、それよりもネットワークを止められないというプレッシャーの方がすごかったです。」と、いい意味で想像とは違った答えが返ってきました。この1週間、ホットステージも含めるとそれ以上の

期間、大きな問題なくやりきったという充実感にあふれたその姿を見て、世代を超えてもインターネットを支えるやりがいや喜びは共有できているのではないかと、まだまだ未来は明るいように思えました。

もう一つは、最終日のセッション「IP Meeting 2018」です。ラストのパネルディスカッションは、毎回その年のテーマに沿って企画しています。今回は「知ってもっと楽しくなりたい! 新技術で変わっていくこれからのインターネット」と題して、総勢8名によるディスカッションを行いました。各分野の第一人者である6名のパネリストから話を引き出すのは、これからの Internet Week を担う若手プログラム委員の2人でした。終了後、懇親会へ向かう前に控室で一息つき、「もっとやれたはず」と言うプログラム副委員長でもある2人は、この経験をきつと来年に生かすに違いありません。このパネルディスカッションを含む IP Meeting 2018 の内容は、次ページ以降で詳しくご紹介します。

最後に

開幕前日に開催された同時開催イベントを含めると、Internet Week 2018 は1週間のイベントです。事務局の SNS [※3](#) と JPNIC Blog [※4](#) では、写真付きで会期中の様子をご紹介していますので、こちらもぜひご覧ください。

最後になりましたが、ご講演者の皆様、ご協賛の皆様、プログラム委員をはじめとした協力団体の皆様など、Internet Week 2018 の開催にご尽力いただいたすべての方々に感謝申し上げます。

今年も同時期に Internet Week 2019 を開催予定です。どうぞご期待ください。そしてその前、2019年5月には、「Internet Week ショーケース [※5](#)」を開催する方向で準備を進めています。過去2回、名古屋、広島と開催し、いずれも地元の技術者の皆様が集う良い機会になったと地元の皆様に想像以上に喜んでいただき、2019年度も開催できることになりそうです。基本的には、今回の Internet Week の講演の中から、地元のニーズも確認した上でプログラムを構成する予定です。もしお近くで開催されることになりましたら、お誘いあわせの上、ぜひお越しください。

(JPNIC インターネット推進部 坂口康子)

※4 Internet Week 2018 フォトレポート
<https://blog.nic.ad.jp/blog/iw2018-photo/>

※5 前回開催実績: Internet Week ショーケース in 広島
<https://www.nic.ad.jp/sc-hiroshima/>

IP Meeting 2018

～知ればもっと楽しくなる～ 開催報告



Internet Week 2018を締めくくる最終日のIP Meeting 2018は、Internet Weekのメインプログラム、そしてプレナリミーティングとして機能しています。今回は、午後二つの興味深いパネルディスカッションが行われましたので、それを中心にレポートします。巻末にパネルディスカッションの写真を掲載していますので、併せてご覧ください。

ここが変だよ、日本のインターネット～こんな良いところもあるよ～

まずは、午後最初のセッションとして「ここが変だよ、日本のインターネット～こんな良いところもあるよ～」というタイトルでパネルディスカッションが行われました。

冒頭でモデレーターの中川あきら氏(日本インターネットエクスチェンジ株式会社(JPIX))からもお話がありましたが、このパネルディスカッションが企画されたきっかけは、2018年6月に広島で開催した「Internet Week ショーケース in 広島」での懇親会、しかも2次会での場でした。

ショーケースに参加していた今回のパネリストでもあるJan Hilberath氏(Open-Xchang (OX Dovecot 株式会社))と中川氏、そしてその場に居合わせたInternet Week関係者が意気投合して、「次のInternet Weekで何かやろう！」となったことから始まりました。具体的な企画を検討するにあたって、当初は外国人から見た日本のインターネットサービスを掘り下げていこうというアイデアがあり「ここが変だよ」というタイトルを思いついたようです。ただ、せっかくドイツ出身で現在進行形で日本で働いているHilberath氏に参加してもらうことから、インターネット/ITC業界の働き方や商習慣まで広げて、日本のインターネット業界について、「良いところ」「変なところ(決して悪いところではなく)」を語り合うというパネル企画にたどり着きました。

最初に中川氏から各パネリストがそれぞれどういった立場での参加であるかを含めて紹介があり、ディスカッションのルールとして「決して日本のダメなところについての話をしない」ということを確認して、パネリストがそれぞれの立場から見た業界の良いところ、変なところを順番に発表していくことになりました。

トップバッターであるHilberath氏からは、日本で働く外国人としての立場から、主に日本のビジネス習慣への戸惑いについて、自身の経歴や経験を交えながらお話いただきました。

続く白畑真氏(さくらインターネット株式会社 社長室)からは、シンガポールからの海外勤務出戻り組として、日本とシンガポールのビジネス環境の違いと類似性、そしてそれぞれのワーキングスタイルの違いなどをメインに、それぞれの良いところ気になるところを挙げてもらいました。

3番手は米国からリモートで参加いただいた吉村知夏氏(NTT Innovation Institute, Inc.)です。国内での業務経験を経て海外に出てみた視点から、日米の事業運営やサービス品質へのこだわりの違いに関して、エピソードを交えながらお話いただきました。

最後は兵頭弘一氏(アリスタネットワークスジャパン合同会社 技術本部)から、日本の外国企業に勤めて、日夜国内外を行き来する技術者として、日米の商慣行やベンダーとユーザーの関係性、そしてビジネスに対するアプローチの違いなどの話がありました。

これらの発表を受けて、パネリスト同士のディスカッションが行われました。総じて、日本の組織の仕事の進め方は非常に慎重で緻密であり、スピード感に欠けるが、その分クオリティの追求に妥協がなく、製品やサービスの信頼性が非常に高いことが挙げられていました。逆に海外では、スピード感を重視し、品質もコストに見合ったレベルで妥協するという違いが、特徴となっていることが共通の見解となっていました。

そして、今後日本でも一層のグローバル化が進展していく中において、通信サービスの品質によって、他の業界や産業を支えるといった場面が増えてくることもあり、スピードとクオリティのバランスを取っていくことが重要であるということでもとまりました。加えて、細部にこだわる日本の持ち味が武器になる場合があり、場面に応じた使い分けも必要ということを確認して、本パネルディスカッションはお開きとなりました。

知ってもっと楽しくなりたい! 新技術で変わっていくこれからのインターネット

IP Meeting 2018,そしてInternet Week 2018を締めくくる最後のプログラムでは、先進的な技術テーマに関する第一人者の方々に登壇してもらい「10年後のインターネット」をテーマに語りあっていただきました。

実績豊富な6名のパネリストと議論をとりまとめていくのは、今年のプログラム副委員長としてInternet Weekのプログラム検討に尽力し、「10年後のインターネット」を担う中心的役割になるであろう

松本智氏(IW2018プログラム副委員長・情報処理推進機構 産業サイバーセキュリティセンター)と吉浜丈広氏(IW2018プログラム副委員長・グリー株式会社/wakamonog)のお二人でした。

10年後の日本は、東京オリンピック/パラリンピックも大阪万博も終了しており、その中で現在のインターネットはどのような存在となっているのか?テクノロジーとヒトの二つの側面から議論を進めていきたいという、松本氏からの前ふりがあり、パネリストからそれぞれ「10年後のインターネット」を語っていただきました。

最初はネットワーク事業を運営する立場として石田慶樹氏(日本ネットワークイネイブラー株式会社)が口火を切りましたが、いきなりGAF(A Google, Apple, Facebook, Amazon)などの巨大プラットフォームと国家に支配されるという悲観的な予測から始まりました。

次に、実積寿也氏(中央大学 総合政策学部 教授)が通信政策、通信経済学、インターネット政策の専門としての立場から、2018年11月のIGF(Internet Governance Forum)パリア会合で語られた、「安全に管理された中国のインターネット」と、「市場支配による自由だが無法なカリフォルニアのインターネット」を引き合いに出して、ユーザーは今後どちらを求めていくのか、といった投げかけがありました。

ブロックチェーンやトラスト研究の鈴木茂哉氏(慶應義塾大学)からは、World Wide Webを考案したティム・バーナーズ＝リー氏がデータを取り戻すプロジェクトを開始したことを紹介し、現在Facebookなどで管理されている個人のデータをユーザー自身がコントロールできるようにするためにトラストの技術が重要になるということを説かれました。

武田英明氏(国立情報学研究所)はAIなどを研究する立場から、AIと仮想世界が発展することで仮想空間の中にBOT的なものが紛れ込んでいても気がつかない状態になるのでは、といったことや、インターネットの分断を危惧する声も聞こえるが、つながっていくことの価値や重要性は維持されていくといったお話がありました。

IoTの分野については、真野浩氏(EverySense, Inc.)から、現在のIoTはIntranet of ThingsであってInternet of Thingsになっていない、データを多くの人たちがシェアして活用できるようにすべきという主張と、End to Endを夢見ながら新しいことができるインターネットは、10年後もこのまま維持されるのではないかと語っていただきました。

最後に松崎吉伸氏(株式会社インターネットイニシアティブ)から、基盤技術の最近の動向と、基盤技術自体の変化は緩やかであり、今後もそれほどダイナミックに変化するものではない、だからこそこの部分をしっかり身につけて覚えていくと長く役に立ち、他のエリアでも有用であることが伝えられました。

パネリストによる一通りの発表後、会場も交えたディスカッションが行われました。いくつか質疑が行われる中で、インターネット上でのさまざまな営みは今後も技術や時代により変化していくが、インターネットの本質であるつながることの意義が重要であること、一方でその基盤としてのインターネットに対して、垂直統合的な影響力を行使してきているGAF(A Google, Apple, Facebook, Amazon)や、国としてインターネットを管理しようとする中で、グローバルな

インターネットの価値観との相違が見えてきている中国への危機感、そしてそれらを背景としてネットワークの安全性担保に関するあり方、考え方など、活発な意見や主張が交わされていきました。

そのような議論を踏まえて、コーディネーターである吉浜氏から、自身も含め若手のエンジニアが「今後どのようにインターネットに関わっていくべきか」という質問が投げかけられました。しかし、パネリストからの回答は総じて「自由にやりたいようにやれ!」というものでした。これは10年前においても、誰も10年後のことを見通していたわけではなく、その時々で「やってみたい、試したい」と思ったことをそれぞれがやってきた結果が今につながっていること、またインターネットがそういったやりたいことができる余地を持っていたため、今後もそのようなやりたいことができる余地を残すことも重要であるという意味が込められていたと思います。

そして最後にパネリストから一言ずつ、10年後を担う若手技術者に向けたメッセージをいただきました。

- ・ アプリ開発も面白いが、その時に基盤技術への目配せを忘れないことが大事(石田氏)
- ・ 技術は言葉のようなもので、やりたいことがあるから使う。使うためには ビジョンが重要(実積氏)
- ・ 最近の学生はみんなアプリの方に興味を持っているため、下のレイヤーにも興味を持ってほしい。技術者同士のコミュニケーションも重要(鈴木氏)
- ・ 技術者が組織を超えて交流するのが当たり前になっている。そのチャンスを生かし、違うレイヤーの技術者同士でブレークスルーを生み出してほしい(武田氏)
- ・ 技術者不足と言われる中で、理系文系を問わず、領域を決めずにチャレンジしてほしい。先を行く者をうまく使うことも大事(真野氏)
- ・ インターネットはまだまだ拡大していく、つながっていない人口はまだまだ多い。一緒に楽しくがんばろう(松崎氏)

10年後のインターネットを語るディスカッションの中で、パネリストから口々に「10年後のことは分からない(笑)」という言葉が発せられていました。

確かに10年前を振り返ってみると、TwitterやFacebookが日本語サービスを始めたばかりで、SNSがここまで社会に浸透していくとは予想外でした。また、Amazon.com社が提供するクラウド基盤が、ここまで急速にITソリューションにおける重要なポジションを担っていくというのも予想できませんでした。なによりIPv4アドレスの在庫が枯渇した先がどうなるか、といったところも見通せていない状況でした。しかし、そんなダイナミックな状況変化が起こるベースには、インターネットが安定的に運用されてきたこと、またそれを支える基盤技術も少しずつ発展、整備されてきたからこそと言えるのではないかと思います。そういう意味で「10年後は分からない(笑)」というのもこのパネルにおける一つの答えだったのではないのでしょうか。分からないからこそ、その先を知って、そして今よりもっと楽しくなるために、技術者がさまざまな領域にチャレンジしていく必要があることを学んだように思います。

開始当初は緊張の面持ちだったコーディネーターの松本、吉浜両氏も、最後には晴れ晴れとした表情に見えたのが印象的でした。

(JPNIC IP事業部 佐藤 晋)